5/11 赤旗

壊される非正規

新型コロナと氷河期世代

1面のつづき

仕事あれば命がけで電車に

急に襲ってくるぜんそくの発作を、市販の酸素スプレーなどでごまかしてきた北岡さん。昨年末、症状の悪化で働けなくなり、ネットカフェ代も払えなくなりました。

過酷な路上生活

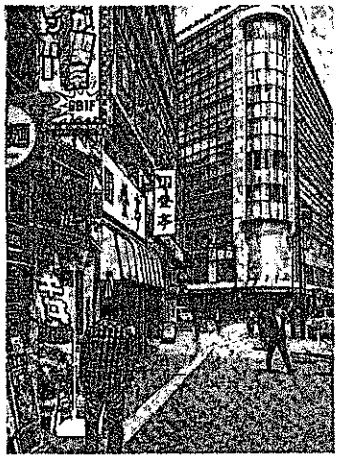
寒空の下の2日間の過酷な路上生活。携帯電話で必死にホームレス支援の取り組みを検索し、池袋の支援会場で谷川智行さん（医師、日本共産党衆院東京比例候補）の医療相談を受けました。

「谷川さんに会っていなければ死んでいたかもしれない」。取材中、北岡さんはそう繰り返しました。

無料低額診療の病院を紹介され、処方されたステロイドの吸引剤で症状は落ち着き、再びネットカフェを拠点に働きだしました。生活保護は親戚に連絡がいくことなどから、受ける気になれないといいます。ところが、今度は新型コロナが経済を襲います。

派遣の仕事は1月から徐々に減り、3月には週1回あればいい方に。再び路上生活に陥り、思い切って谷川さんに連絡をしたときには所持金は120円しかありませんでした。

谷川さんはすかさず、ネットカフェ生活者などを対象とした都の一時的住居支援制度を紹介し、日本共産党の藤田りょうこ都議とともに申請にも同行。無事ビジネスホテルに入ることができました。今月中旬には都が用意したアパートに移り、生活再建に向けた暮らしをスタートさせる予定です。

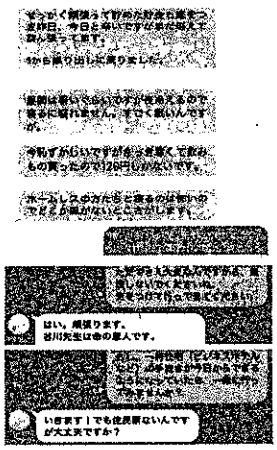


ネットカフェの看板を見る北岡さん（仮名）

都によればネットカフェの休業要請後、約850人が都が借り上げたホテルへ入居しました。

ぜんそくは新型コロナの感染リスクを高めます。そのことに話を向けると、北岡さんは笑いながらうなずき「それでも、仕事があれば命がけで電車に乗る」と語ります。

「ホテルでは食事も保障されているが、アパートに移ったら出ない。せめて当面の食費と仕事の交通費はいまのうちに稼いでおきたい。3～4カ月後には自分で住む家を探さなければいけないので、そのための資金も必要。仕事を選んでいる余裕はない」



新型コロナの影響でたくわえが尽きた北岡さんと谷川さんのインターネット上でのやりとり。右側が谷川さん（画像はやりとりの一部分を抜き出し時系列に並べたもの）

政府の「就職氷河期世代」支援は、おおむね1993～2004年に学校を卒業した時点で、不況のためやむなく非正規として働きだした人たちを念頭に置きます。北岡さんのように、卒業年は氷河期でも、当初は正社員として安定した収入を得ていたような人は政府のイメージに重なりません。

路上生活者の医療相談を10年以上続けている谷川さん。多くの人は北岡さん同様、がまんを重ね、病気が相当進行した状態にならないと相談に来ないと語ります。

「いまの社会はいったん路上やネットカフェで生活するようになると、簡単に普通の生活に戻れない仕組みになっている。そうした人たちは、質の高い食事や睡眠など当たり前のことから遠ざけられ、人間性を否定される体験を重ねるなかで、自分を大切にする気持ちをどんどん奪われていく」

非正規雇用は氷河期来期の04年から19年の間に600万人以上増加。全労働者に占める割合も31・4％から38・3％へと増えています。派遣労働者の多くが貧困にあえぐのを横目に派遣市場は急成長。政府との深い関係が指摘される派遣大手「パソナ」の創業者の収入は、役員報酬と自社株の配当だけで年間4億4千万円を超えます（18年6月～19年5月期）。

3年ぶりの布団

北岡さんが入るホテルは都心の歓楽街のなか。取材前日は近所のホストクラブのシャンパンコールが騒がしく寝付けなかったと苦笑します。それでも「3年ぶりの布団や風呂にしびれた」と興奮気味に語ります。

「久しぶりの布団で普通の生活のありがたみが分かった。人に裏切られ閉ざしてきた心も、谷川さんや支援団体の人たちに救われた。復活して頑張る姿を見せることで恩返ししたい」

（佐久間亮）